

転校生を通して考えたこと

久米南町立神目小学校

六年生 山本光哉

ぼくは、初詣で神社へ行く途中に、いっぱい質問をした。相手は、大みそかの前の日に引っ越してきた池田君だ。

「前に住んでいたのはどんな所だった。」

「前の学校はどんな所だった。」

「山は好き。」

「将来は何になるん。」

十一月に、地区長のゆういちさんからお父さんに連絡があった。

「今度、千葉から引っ越してくる方だなあ、うちの下の家があったけん、そこに来ることになったんじゃ。その方とズーム会議するけん、家族みんな集まってんな。」

と、ゆういちさんのうれしそうな声が電話の向こうから聞こえ

てきた。

金曜日の夜に、家族みんなで集会所に行くと、役場の人も来ていて、大きな画面の向こうに池田君のお父さんとお母さんが映っていた。お父さんたちは、池田君の住んでいる千葉のこと、ぼくたちが住んでいる山手のことをお互いに話していた。ぼくも少しだけ自己紹介をした。その時に、池田さんの家には、小学一年生と六年生の兄弟がいることを聞いた。うちもぼくが六年で弟が一年で同じだ。その時から、ぼくは池田君のことが気になってしょうがなかった。

お正月の日に、集会所に地域の人たちが集まって、池田さんたちの引っ越しのお祝いをするようになった。

「うちは、するめでだしをとって、かまぼことごぼうを入れるくらいかなあ。」

関東は四角いもちを焼いて、関西は丸もちをにてつくること、だしのとり方や雑煮にのせる具は、家で全然ちがうことをお母さんたちは話していた。ぼくたち男四人組は、となりの部屋でたくさん話をした。

一月三日に、

「ちん守さまにお参りに行こうと思ってるんだけど、いっしょに行かない。」

と池田さんたちが来てくれた。神社までは、山を下ってニキロか三キロある。夏祭りには行くが、地元の神社なのに初詣には行ったことがない。ぼくは、もちろんいっしょに行くことにした。その時に、ぼくはいっぱい質問した。

ぼくは学校に行く時にいつもバスで通っている道だけど、池田君は、

「木が高いなあ、何の木かなあ。」

「この畑、広いなあ、何を作ってるの。」

といっぱい聞いてきた。二人とも質問ばかりだった。質問に答える前に、もう次の質問を考えている感じだった。お父さんにそのことを話すと、

「こーやが質問したことのこーやの答えは何じゃったんかなあ。」

今、住んどの所はどんな所。今の小学校は。こーやは、山は好きか。こーやの答えを池田君に話したか。」

と言われた。

ぼくが住んでいる山手のこと、学校のことなど考えたことがない。山は朝から夜までいつもあるから好きとかきらいとか、考えたことがない。住んで当たり前、あって当たり前と、どれも当たり前すぎて考えたことがないことばかりだった。そんな質問を池田君にしたのはちよつとはずかしかつたかなと思つた

が、お父さんと話しながら、自分の答えを考えてみた。

ぼくが住んでいる所は山ばかりだが、ぼくは大好きだ。時間があれば、弟と散歩する。どこを見ても、木や草やぶどうや野菜の畑ばかりだ。夜は空いっばいに星が見える。夏にはクワガタやカブトムシが飛んで来る。秋からは雲海の上に住むことになる。どんなに大声を出してもだいじょうぶだ。地域のおじさんやおばさんは、ぼくの顔を見ると声をかけてくれる。学校のみんなはやさしいし、いっしょにいるいろいろなことをがんばれる。学校は楽しいことばかりだ。

一番難^{じずか}しかったのは将来のことだ。今までお父さんやお母さんに聞かれても、ぼくは、

「ううん。」

と言つていつも終わりになつてしまふ。やりたいことはたくさんあるのに、はっきり答えることができないで終わつてしまふ。ずっとそんな感じだった。

でも、それはそれでいいかなと思ふ。新しい友だちや今までの友だちやお父さん、お母さんや地域のおじさん、おばさん、いろいろな人とたくさん話をしていくうちにだんだん決まつていくかなと思ふ。だから、池田君とたくさん歩いて、たくさん話をして、たくさん質問をし合つていこうと思ふ。